ラウンドシステム 解説

リテリングで生徒の表現力が向上！

――ラウンドシステムの可能性

西村秀之（にしむらひでゆき）
玉川大学准教授

「英語教育相談室No.6」の特集でも、ラウンドシステムを取り上げました。ぜひご覧ください。

生徒の力はどう伸びる?

3年間、教科書を使う生徒とともに登場人物が成長していくストーリーが特徴の『Here We Go!』。その特徴を活用して行う「5ラウンドシステム」(以下、5ラウンド)は、現在全国の100校以上の学校で実践されています。

5ラウンドは、もともと「生徒が英語を通じて自分の思いや考えを伝えられる力を育成する」ことを目的としたカリキュラムです。実際に、生徒は戸惑うことなく英語を使い即興でおしゃべりし、母語のようにスラスラと書く姿が見られます。そうした姿を見た先生方により、徐々に実践が広まっていったと考えられます。一方で、「具体的に力がどう伸びるのか」という不安の声も聞かれます。そこで、生徒の力の伸びの傾向を具体的に見ていく必要性を感じ、実際に5ラウンドを行っている中学2年生の授業における生徒の変容を見ることにしました。

生徒のリテリングの変容

このクラスでは、ラウンド1で「お試しリテリング」を行っています。ラウンド1は、通常リスニングによる本文の概要把握が主となりますが、10回程度音声を聞いた後、理解したことを言える範囲で言わせる取り組みを行います。そして約10か月後、最後のラウンドで改めてリテリングを行います。この際、教員による表現の指定はありません。また、メモなどはなく、即興的な発話です。Unit 1の生徒の発話を文字に起こしたところ、同じストーリー(Unit 1)のリテリングながら、ラウンド1の「お試し」から、次の変容が見られました。

①生徒が時制や状況をより正確に表すよう意識するようになった様子が見られた。

> (例)ラウンド1での発話: They and Hajin talk about on spring vacation. → ラウンド5での発話: And they are talking about spring vacation.
> <同生徒による。原文のまま>

②使用する表現の広がりが見られた。

ラウンド1のときには誰も使っていなかった接続詞when(Unit 1で初出)や、to不定詞(小学校や1年で表現として触れてきた)が、最後のラウンドでは使われるようになっていました。教科書で出てきたto不定詞を含む言い方をそのまま使うだけでなく、自ら作り出して表現する様子も見られるようになりました。

ラウンド1の「お試し」から最後のラウンドのリテリングに至るまでの間に、生徒は本文を50回以上聞いたり読んだりしています。実際の生徒の発話から、Unit 1～8で本文に繰り返し触れてきたことで、いろいろな場面・文脈で使われているさまざまな表現を理解し、状況に応じて使えるようになったと考えられます。

今後も、5ラウンドを実践されている先生方ともに、多くの生徒の姿からうかがえる発話の伸びについて、検証していきたいと考えています。